

# ろんだん 佐賀



## 岩永 雅也さん

放送大学長

いわなが・まさや 1953年嬉野町生まれ。就学前に千葉転居。筑波大附属高—東京大卒—同大学院修了。大阪大、放送教育開発センターを経て2000年に放送大学教授、21年から放送大学長。専門は教育社会学。チョウ、馬、自転車、農作業など趣味は雑多。千葉市。

先月の本欄で、「佐賀の存在感の薄さ(失礼)」の一因として「アピール不足」があるのでは...と書いた。それは、佐賀にはユニークな歴史も魅力ある景観や産品もあるのだから、それを今以上にうまくアピールしていくことで存在感、プレゼンスをより高められるのではないか、という思いからであった。しかし、問題は、どの魅力をどのように...である。不幸にして筆者はマーケティングの専門家でもキャッチコピーの名手でもなく、その方法的なアイデアはほとんど持ち合わせていないが、ここではあらためてアピールの前提となるべき「佐賀の魅力」にあるいは「佐賀らしさ」について考えてみたい。

佐賀県民の多くは、佐賀市中央通りに沿って佐賀ゆかりの傑物の等身大像25体

## 佐賀の魅力

が置かれていることを存じだろう。開明的藩主鍋島直正をはじめ、大隈重信、大木喬任、辰野金吾、江崎利一、伊東玄朴...といった郷土の偉人たちの像である。全長約1・5mのプロムナードを歩くうちに、それら傑出した人物たちの優れた事績や来歴を概知する

## 「平時」こそ佐賀人の出番

はその中にいる。江藤新平や島義勇などは倒幕軍にあつて幕府軍と戦い、最終には佐賀の乱で敗死している。しかし、彼らの事績としてたたえられているのは、西洋科学技術の藩への先取導入や明治維新期の司法制度創設、北海道札幌の

ら、佐賀の地が生んだ偉人たちに通底するのは、「行政」「学術」「文化」「産業」といった平和な時代と分野の価値観だということがわかる。一見して派手さがない、突出したところの少ない佐賀人と見られがちであるが、どうしてどうして「平時」にはめっぽう強

いのである。そんな25人の偉人たちの中で、私が特に強く印象づけられた人物がいる。田澤義輔である。今から40年以上も前の話になるが、当時大学の助手になりたてだった私は、日本青少年研究所の高校生国際比較調査に関わっており、しばしば研究所のあった日本青年館(明治神宮に隣接)に出入りしていた。その正面ロビーの一番奥まったコーナーにその胸像はあった。まだ若く傲岸不遜だった私が「これ誰ですか?」と生意氣至極の質問をすると、研究所の千石保所長から、「この方は日本の青年団の父とも呼ばれる田澤先生だ。今日の社

会教育の基礎を作った方で、明治神宮の森(神宮の杜)も全国の青年たちと一緒に作ったんだ。私は毎朝、ここに一礼して通っている。その後、その偉人の出が嬉野の隣の鹿島だと知り、いっそ不明を恥じることとなった。ほろ苦い思い出である。

